昭和49年度修士論文概要

精神分裂病者の人間学的研究

― 治療的面接とロールシャッハ法を通して ―

細　野　純　子

問題と目的

人間学的現象学的研究は新しい経験科学として定着し，分裂病者の個人的世界を鮮明に分析したことはもとよりそれを踏まえて従来の自然科学的思考においてはとらえきれなかった分裂病の基礎障碍を解明し，さらに症状論も構築してきている。このような背景の中で，分裂病者の理解が一層深められてきているといってさしつかえない。しかしながら理解することや基礎障碍を明らかにすることは，分裂病者への治療的接近にとって必要条件ではあるが，十分な条件とはなりえない。分裂病者への治療的接近には，病者の理解や基礎障碍を包括し，さらに病者の本来的自己実現をも援助しうる観点が必要とされているのである。このような観点は，病者との直接のかかわりの場である臨床実践の場からはいうまでもなく，人間学的研究の理念からしても俟たれているといえよう。筆者は「出会いの現象学」を導入し，この要請に応える試みを呈示した。ここでの「出会い」とは，「根源的共通感覚の上にたって『生きられた経験』を通して，自己が自己として，物が物として成立し，さらに形成されていくさまざまなかかわりの弁証法的相互作用過程それ自体」を意味している。この『生きられた経験』とは，Merleau-Pontyが，「事物を知覚するためには，それらを生きなくてはならない」としている意味での『生きる』ということである。この観点は，分裂病者の存在様態はもとより，彼らの本来的な可能的様態やそれへの過程（いわば治療過程や寛解過程）をも詳細にとらえうると考えられる。

本研究は以上に述べた観点から「分裂病者の出会いの現象学－分裂病者の存在様態の理解，可能的様態，自己実現の過程の提示を含む－」を究極の目的とした基礎的研究である。そのためにまず分裂病者の存在様態を理解することはその基礎的条件でもある。ここでは表現の違いはあれ，Binswanger，Minkowski，Kronferd，Blankenburg，木村へと引き続き明確にされてきた分裂病の根源的事態を把握しながら，「出会い」の概念を導入することによって，病態把握にとどまるのみならず，その都度，その都度を生きている分裂病者の存在様態を明らかにし，さらに彼らの可能的様態，出会いの可能性をもとらえてゆくことを意図する。このために，Binswangerの以下の三点を踏まえて明らかにする。

①世界投企もしくは世界像の諸様式。

②どのように自らを自己化し，あるいは自己化しないのかというその仕方。

③乗り越え及び内在の仕方。

そして彼らの出会いの在り方，出会いの可能性について考察する。

方　法

・研究の対象　診断基準の明確な中核群の分裂病患者三名一女性，症例S.（27才），K.（23才），Y.（26才）。

・接近の方法　週一度の治療的面接を継続し（8ヶ月～2年），その過程で適宜ロールシャッハ法を施行した。分析にあたっては，治療的面接状況それ自体，面接内容，ロールシャッハ法，彼女ら自身の著作，日記等への現象学的接近を試み，まず個々の症例ごとにその存在様態を浮き彫りにし，さらに現象学的接近を遂行し，三例を通してその根底的事態を抽出し，総合的に考察する。

症　例

紙数の制限上，ここでは極めて簡単に症例報告をするにとどめる。以下重要な部分を多く割愛せざるをえなかった。詳しくは修士論文を参照されたい。

症例S.…S.自らは両性的複数的存在（八人の自分―四人の男の子と四人の女の子―が重なっている）として在り，他者も相互に入れ替わり可能であり，「本当は何にもない」ときこえてくるように，その存在感，生命感は極めて稀薄である。これは「星の光」にさえぎられているからであるとS.は言う。S.には「何から何までわからないことばかり」なのであり，世界における自然な自明性が成立しえていない。S.は「親の腹の中」にいると言う。しかし面接過程の中において，「星の光」は決して恒常的なものではなく，S.はいろいろなことに実感がもてるようになってきている。

症例K.…Kは自らを「エリザベス女王の娘，万物の創

造主である」と思っているが，身体と魂が遊離可能であり，独立した個別的自己として存在しえていない。自己他者共に入れ替わり可能である。又S.は「宇宙の鏡」が存在し，すべて存在するものは，この鏡に映ることによってみえると語っているように，存在を前存在論的に把握しているのではなく，鏡の介在によってはじめて知ることができるのである。これは生きた出会いから隔たっていることを示しており，生命感・存在感の稀薄さをも示している。しかし，この鏡の介在，存在感・生命感の稀薄さは決して恒常的なものではなく，顕著な変化がみられている。

症例Y.…Y.は人との交わりにおいて，自然にありのままの自分を出すことができず，自分の殻に閉じ込もることが悲しい本性のようになってしまい，真の接触を求めようとしても真の接触ができないと記している。表の自己とその背後の自己が異なっているが故に，二重構造の世界を生き，自己が他ならぬ当の自己として，他者が他ならぬ当の他者として存在しえていないのである。自己はさまざまな人が幾重にも重なりうるようになるのである。共に生きられた経験が乏しい故に，自然な自明性が成立しえず，世界は無規定な生命の通わない世界になったり，不気味な様相を呈してきたりする。しかし虚無と生命感の枯渇の中でなお現実に生きようとする彼女の姿も現に存在しているのである。

まとめと考察

①世界投企，世界像の諸様式…S.，K.，Y.，の世界においては，体の全感覚で生きられ，確かめられた生活空間が消失，あるいは稀薄となり，かわって彼女達の内的世界が投映された世界構造が現われてきている。彩られる世界の様相はそれぞれ異なるにしても，彼女達は生きた共同世界との出会いから隔てられており，諸事物を本来の価値や属性をもつものとして出会わせる場とはなりえていない。それ故，現実の世界で生活を営んでいくにあたっての極めて基本的な実践的生活感覚が身についていないという事態が彼女らにおいて現出し，それが訴えられていると考えられる。

②自己化について…S.，K.，Y.，には自己が他ならぬ当の自己として存在しえていない生命感・存在感の稀薄な存在様態が現出している。さらにこれを現出せしめている事態，つまり存在論的次元へと考究を進めていくとこの存在論的次元において分裂病者は，二人称的事態に臨み，共にその出会いをしっくり生きることができないという事態が根底にあることがみられてくる。いわば，分裂病者には，生きた出会いの状況へと自然に滲透しえない事態が生起しているのである。生きた出会いの弁証法的生成持続過程とは，それぞれ表現は異なるにせよ，Minkowski，Merleau—Ponty，木村らが述べているところの人間が個別的自己として，他者が個別的他者として，事物がそれ個有の目的と属性をもった事物として存在しうるための根底的事象である。本来明るみであり開けである現存在は，自己をこのような生きた出会いの場となしえているのであるが，分裂病者の場合，自己が他ならぬ当の自己として存在しえていない生命感・存在感の稀薄な存在様態の根底には，自己をこのような生きた出会いの場となしえていない事態があるのである。しかしここで分裂病者は，この生きた出会いから全く隔たっているのではないことに着目しなければならない。分裂病者にあっては，この自己が他ならぬ当の自己として，他者が他ならぬ当の他者として成立しうるに足る十分な生きた出会いが成立しえていないのである。つまりこの事態は，従来とらえられてきたように，対人関係，あるいはコミュニケーション等と呼ばれていようと，これらの拒否，喪失，欠如といった事態ではなくて，未だ十分に成立しえていないのであり，これを病者の方からみれば，生きた出会いの状況へと自らをどう滲透させてよいのかわからないというような困惑や不自然さをともなった十分に生きられていない事態なのである。このように考えてはじめて分裂病者が不鮮明な自己を感じていることや存在感・生命感の稀薄さを理解することができる。

③乗り越え及び内在の仕方…以上のように分裂病者においては，共に生きた出会いが十分に成立しえていないが故に，世界の中に自明的に親しんで，過去を引き継ぎ，現在になめらかに内在しながら，その都度その都度を将来へ先がけて一歩一歩踏みかためながら決意していくといういわば人間の本来的時熟の形態が流動的に展開しえていないことがみられている。

最後に，分裂病者は虚ろではあるが不鮮明な自己を見出しうるほどには出会いが成立しているのであり，生命感・存在感のある世界を感じることができるが故にその稀薄さを訴えることができるのであり，生きた出会いを求める面もあるが故に出会いの状況へ滲透できない自己を訴えるのであることに留意しなければならない。分裂病者における十分な生きた出会いの形成過程をさらに明確にすることが今後の課題となろう。